

11. 貝類

選定・評価方法の概要

貝類では、前回の本土部レッドリスト 2010 に対象とした範囲を踏襲して、陸域・淡水域を含む陸水域に生息する種とした。陸水域の一部として、いわゆる干潟に生息する種も対象とし、ハマグリ等も含めたが、干潟にも分布する海域主体に生息する種は基本的には対象外とした。また、種小名の確定していない種 (sp. で表記したもの；未記載種や現時点で種レベルの種名の確定が困難なもの) も対象とした。対象種は、これまでに東京都から分布記録が報告されている種か、本レッドリストのための調査を含め東京都産の標本が存在するもののみとした。

対象とした年代は前回同様に明治期以降としたため、それより以前の外来種と考えられる種 (例えばマシジミ) も評価対象とした。また、最近の遺伝子解析によって在来種が多く群に分かれることが判明しても従来から知られていた種との異同が明確にされていない場合、これまでレッドリストに掲載されてきた種は自然環境を指標する残すべきものと考え、今回も対象とした。

貝類では、分布記録は比較的多く、多摩川流域としておよそ東京都を網羅する地域の陸域・淡水域・海域のおよそ 20 世紀までの記録をまとめ (黒住, 2003)、前回の評価の基礎とした。それ以降の調査結果として、主に陸域・淡水域での南多摩の八王子市 (黒住, 2016)、区部の明治神宮 (黒住, 2013) での量的評価や皇居での 10 年間の確認の有無のリスト (上島ほか, 2014)、多くの環境アセスメントデータにより新規の評価を行った。干潟からヨシ原に生息する種についても多摩川左岸の近年の調査 (柚原ほか, 2015) と共に、河川水辺の国勢調査を含めた多数の環境アセスメントのデータを利用した。

従来から陸産貝類の好適な生息地として知られている西多摩の日原鍾乳洞等の地域では、大規模な森林伐採等の人為的な変化は少ないと想定されていたが、近年の入手できる情報がほとんどなかったため現地調査を行った。日原地域以外にも、放棄水田で重要な種が確認されている連光寺・若葉台里山保全地域や人工干潟である葛西海浜公園東なぎさ等で現況調査を行い、評価の基礎資料とした。

貝類では、高度経済成長期以降のものを除き経時的な密度変化を示すデータはほとんど存在しないので、評価は定性的要件に基づいた。そのため、基本的に絶滅危惧 I A 類 (CR) と絶滅危惧 I B 類 (EN) の評価を区別しなかった。

対象としたものは、およそ陸産 100 種、淡水産 30 種、汽水・干潟産 20 種程度で、このうち、93 種を検討対象種とした。

選定・評価結果の概要

評価の結果、検討対象種 93 種のうち、87 種を掲載種として選定した。区部にのみ生息環境が存在する汽水・干潟産種では、干潟の消失等で多くの種が絶滅と判断されたが、江東区の葛西海浜公園東なぎさや多摩川河口左岸にはヨシ原とその前面に小面積の砂泥干潟が存在しており、このような場所に生息する種も比較的多く掲載した。

多摩川のヨシ原等は近年多発している洪水によって激変した状況を認め、現在は密度が高い種でも高いランクを与えた種もあった。このような状況下で、東なぎさは造成されたものではあるが、人の立ち入りが強く規制され、また洪水等の影響を受けにくく、そして干潟からヨシ原 (潮上帯) まで環境が連続して存在しており、小巻貝のカワザンショウガイ類や二枚貝のサビシラトリ等の東京湾における干潟からヨシ原に生息する種の避難場所 (あるいは供給源) となっていると考えられ、今後も同様な管理が期待される。また、干潟等の環境アセスメントでは、小面積を採泥器で調査することが主流であるが、多様な環境を調査できる目視 (見つけ採り法) を重視するような調査依頼も望まれる。ただ、この採泥器調査によって、前回リストに掲載していたカワグチツボとウミゴマツボは、潮下帯に時に高密度で生息していることがわかり、今回の評価で選定外とした。

淡水産の種も、区部を中心に水田・湿地の埋め立てや水質汚染等による生息場所の消失・変質によって多くの種が高いランクとなった。淡水産二枚貝類では、皇居のカラスガイやタナゴの産卵母貝となる種 (マ

ツカサガイ等) では、人為的な移入の可能性も否定できない場合もあり、今後の検討を待つこととした。近年、溜め池等を干し上げて、外来生物の駆除や池の環境改善のために、“かいぼり”を行うことが多くなってきている。今回もこれまで東京都から記録のなかったイシガイが北多摩からかいぼりによって確認された。近県から記録があるものの、東京都の記録・標本を確認できなかったフネドブガイは選定外となった。逆に、ヌマガイは少数ながら、各所で継続的に確認されており、やはり選定しなかった。このように、かいぼりの折に得られた情報と標本がうまく集約されることが望ましい。

陸産貝類では、人為的変革が少なく高い多様性を保っていると考えてきた多摩地域の高尾山や日原等の鍾乳洞周辺での調査で、確認はできたものの個体数の激減している種が多数存在していることが明らかとなり、キセルガイ類を中心に絶滅が危惧された。一方、丘陵地や低地部に残存している皇居等の良好な自然環境を有する地点での変化は大きくないようであった。

南多摩の多摩市内の湿地から、日本各地においても生息地の少ないナタネキバサナギガイと同属のキバサナギガイ類が報告され、緑地管理者により柵で囲われて無許可の立入りを禁止するように保全されており、今後の対応策の一例として評価されよう。ただ、現地調査により、湿地の乾燥化が急速に進行して 2 種が激減していることが確認された。今後の管理方策の検討が望まれる。なお、後種のキバサナギガイ類は、これまでにヤマトキバサナギガイ (エコたまグリーン NEWS)、あるいはキバサナギガイ (東京都環境局) として報告され、2 つの名は現在もインターネットで検索できるが、最近の研究では、オキノエラブキバサナギガイ類似種とされており (Nekola et al., 2018)、全て同じ種を指していることに注意されたい。他にもキバサナギガイとして、多摩川の河川敷から死殻が報告されていたもの (黒住, 2003) も、オキノエラブキバサナギガイ類似種として評価した。

(黒住 耐二)

引用文献

エコたまグリーン NEWS 第 147 号

https://www.ecomeetingtama.jp/kannkyoukaigi/wp/wp-content/uploads/2014/12/ecotamackeannews_No147.pdf : 2020.2.29 閲覧

亀田勇一, 2018. 陸・淡水産腹足類日本固有種目録 (2018 年 3 月版)

http://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot_japan/endemic_list : 2019.5.1 閲覧

環境省 <https://www.env.go.jp/files/jp/110615.pdf> : 2019.7.25 閲覧

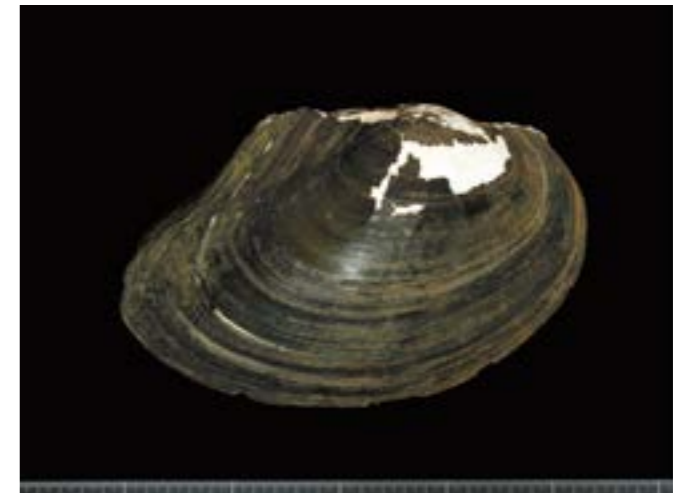
東京都環境局

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/natural_environment/tokyo/area/50_renkouji.html:2020.2.29 閲覧

黒住耐二, 2003. 多摩川水系の貝類から見た自然環境の現状把握と保全に関する研究, (財)とうきゅう環



葛西海浜公園の干潟



市街地の残された湧水地 (板橋区)

境浄化財団. 研究助成・学術研究, 31 (226) : 1-242.

黒住耐二, 2013. 明治神宮で確認された非海産貝類. 鎮座百周年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書 : 416-431.

黒住耐二, 2016. 貝類. 新八王子市史自然調査報告書, 八王子市動植物目録 : 247-254.

Nekola, J.C., S. Chiba, B.F. Coles, C.A Drost, T. von Proschwitz and M. Horsak, 2018. A phylogenetic overview of Genus *Vertigo* O. F. Muller, 1773 (Gastropoda: Pulmonata: Pupillidae: Vertigininae). *Malacologia*, 62 (1) : 21-161.

日本ベントス学会 (編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑, 海岸ベントスのレッドデータブック. xvii + 285 pp.

奥谷喬司 (編著), 2017. 日本近海産貝類図鑑 [第二版], 1375 pp.

上島励・元珍力昇・長谷川和範・齋藤寛, 2014. 皇居の陸産貝類相. 国立科学博物館専報, (35) : 197-210.

柚原 剛・田中正敦・阿部絢香・海上智央・多留聖典, 2015. 多摩川河口の塩性湿地に生息する表在性ベントス相. 神奈川自然誌資料, (36) : 25-30.

写真提供者

丹下和仁、東京都港湾局